

修士論文(要旨)

2011年1月

アレキシサイミアの感情制御について

—防衛機制とその影響因としての親の養育態度・愛着からの検討—

指導 中村延江教授

心理学研究科

臨床心理学専攻

209J4002

津山 雄亮

目次

はじめに	1
第1部 先行研究	
第1章 感情制御について	
第1節 感情制御とは	2
第2節 感情制御と発達	3
第2章 アレキシサイミア	
第1節 アレキシサイミアと構成概念	4
第2節 様々な要因との関連	5
第3節 アレキシサイミアの発症機序	7
第3章 アレキシサイミアの感情制御における背景要因	
第1節 アレキシサイミアと防衛機制	9
第2節 アレキシサイミアと親の養育	11
第3節 アレキシサイミアと愛着	12
第2部 本研究	
第1章 目的	15
第2章 方法	
第1節 調査期間と調査対象者	16
第2節 使用した調査票	16
第3章 結果	
第1節 因子分析と記述統計	
(1) アレキシサイミア尺度(TAS-20)の因子分析	19
(2) 防衛機制尺度(DSQ-42)の因子分析	20
(3) 記述統計	24
第2節 アレキシサイミアと防衛機制との関連	
(1) アレキシサイミアと防衛機制との関連	27
第3節 アレキシサイミアと親の養育態度、愛着との関連	
(1) 親の養育態度と愛着との関連	29
(2) アレキシサイミアと親の養育態度との関連	29
(3) アレキシサイミアと愛着との関連	30
第4節 防衛機制と親の養育態度・愛着との関連	
(1) 防衛機制と親の養育態度との関連	31
(2) 防衛機制と愛着との関連	33

第4章 考察

- (1) アレキシサイミア尺度(TAS-20)の因子分析・・・・・・・・・・34
- (2) 防衛機制尺度(DSQ-42)の因子分析・・・・・・・・・・34
- (3) 記述統計・・・・・・・・・・35
- (4) アレキシサイミアと防衛機制との関連・・・・・・・・・・36
- (5) アレキシサイミアと非アレキシサイミアの防衛機制の様相・・・・・・・・36
- (6) 親の養育態度と愛着との関連・・・・・・・・・・37
- (7) 防衛機制と親の養育態度との関連・・・・・・・・・・38
- (8) 防衛機制と愛着との関連・・・・・・・・・・38

第3部 総合考察

- 第1章 本研究の結果の要約・・・・・・・・・・40
- 第2章 本研究の考察・・・・・・・・・・42
- 第3章 本研究の今後の課題と展望・・・・・・・・・・44

引用文献

謝辞

資料

I. 問題と目的

私たちは、日々の生活の中で様々な感情を経験し、それをうまく制御することで、環境に適応し生活している。しかし、Sifneos(1973)が見出した、アレキシサイミアと呼ばれる人たちは、1) 自分の感情や身体感覚に気づいたり区別することが困難で、2) 他者へ自分の感情を語る事が難しく、3) 空想力や想像力が乏しく、4) 自己の内面よりも外的な事実に関心が向くといった特徴を有している。そのため、ストレスがうまく発散できず、心身症を初め、様々な疾患の難治化といった、不適応状態に繋がるといわれている。また、アレキシサイミアの人たちは、精神力動的な研究では、ストレスとなる事態に対し、成熟した防衛ができず、未熟な防衛機制に頼るといわれている(Wise, Mann&Epstein, 1991)。そこで、未熟な防衛機制に頼ってしまう要因、あるいは成熟した防衛機制を使用できない要因を明らかにすることで、不適応状態の改善を図ることができると考えられる。しかし、なぜ未熟に頼り、成熟した防衛機制が使えないのかについては今まで言及されてきていない。そこで、本研究では、アレキシサイミアの人がなぜ未熟な防衛機制に頼り、成熟した防衛機制がうまく使えないのかについて検討する。その要因として、先行研究においてアレキシサイミアとの関連が指摘される親の養育態度と愛着から検討することとした。

II. 方法

調査対象者は、私立大学に通う大学・大学院生 330 名であった。調査票は、アレキシサイミアの測定として、Toronto Alexithymia Scale-20、防衛機制の測定には Defense Style Questionnaire-40、親の育児態度の測定には TK 式診断的新親子関係検査、愛着測定には Internal Working Models 尺度を使用し、各尺度間の関連を検討した。

III. 結果と考察

TAS-20 の下位因子である感情認識困難と感情言語化困難は、未熟な防衛と正の関連があり、外面性志向の思考で成熟した防衛と負の関連があった。次に、TAS-20 のカットオフポイントによりアレキシサイミア群と非アレキシサイミア群に分け、防衛機制を比較したところ、未熟な防衛はアレキシサイミア群が有意に高かったが、成熟した防衛では両群に差がみられなかった。次に、アレキシサイミアと親の養育態度、愛着との関連を検討したところ、支配的、拒否的で、矛盾した親の養育態度と回避型の愛着が特に関連していた。次に、関連のあった未熟な防衛と、親の養育態度、愛着を検討したところ、アレキシサイミア同様に、支配的、拒否的で、矛盾した親の養育態度と回避型の愛着が特に関連していた。

本研究においても、アレキシサイミアと未熟な防衛との関連が見出された。また、成熟した防衛において両群に差がみられなかったことから、アレキシサイミアの人は、何らかの不快感情が多く、その分多くの防衛機制を使用するため、未熟にも頼っているというこ

とが考えられた。あるいは、成熟した防衛を使うも十分に機能せず、感情をうまく制御できていないため、未熟な防衛を使用していると推察される。また、アレキシサイミアの人が未熟な防衛に頼ってしまうことに関しては、因果関係を想定するならば、両親の支配的、拒否的で一貫しない養育態度により、十分な感情の交流もできないため、不安定な愛着が形成され、防衛も機能的に十分に成熟せず、不快な感情が生じた際にうまく対処できず、未熟な防衛に頼るという道筋となるかもしれない。しかし、本研究では因果関係を推測することができる変数がないため、一仮設という位置づけにとどまらざるをえないであろう。

本研究では、アレキシサイミアの人がなぜ未熟な防衛に頼り、成熟した防衛ができないのかについて検討し、未熟な防衛には不適切な親の養育態度と不安定な愛着が関連していた。今後は、それらの要因がどのようにアレキシサイミアの防衛機制の改善に役立つかを検討することを今後の課題としたい。また、今回の研究では、抑うつや不安が交絡要因として働いている可能性も考えられたため、今後はその点を考慮し、研究を進めたい。

引用文献

- Andrews, G., Singh, M., & Bond, M. (1993). The defense style questionnaire. *Journal of Nervous and Mental Disease*, 181, 4, 246-256.
- Bagby, R. Michael, Taylor, Graeme J. Ryan, David (1986). Toronto Alexithymia Scale: Relationship with personality and psychopathology measures. *Psychotherapy and Psychosomatics*, 45-4, 207-215.
- Bagby, R. M., Taylor, G. J., & Ryan, D. (1986). Toronto alexithymia scale: Relationship with personality and psychopathology measures. *Psychotherapy and Psychosomatics*, 45-4, 207-215.
- Bagby, R. M., Taylor, G. J., & Parker, J. D. A. (1994). The twenty-item toronto alexithymia scale: II. convergent, discriminant, and concurrent validity. *Journal of Psychosomatic Research*, 38-1, 33-40.
- Bond M, Gardner ST, Christian J, & Sigal JJ (1983). An empirically validated hierarchy of defense mechanisms. *Archives of General Psychiatry*, 40, 333-338.
- Bond M (1986). Defense Style Questionnaire. In GE Vaillant (Ed), *Empirical studies of ego mechanisms of defense*, 146-152. Washington, DC: American Psychiatric Press.
- Hazan, C. & Shaver, P. (1987). Romantic Love Conceptualized as an Attachment Process. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 3, 511-524
- 小牧元, 前田基成, 有村達之, 中田光紀, 篠田晴男, 緒方一子, 志村翠, 川村則行, 久保千春(2003). 日本語版 The 20-item Toronto Alexithymia Scale (TAS-20)の信頼性, 因子的妥当性の検討. *心身医学*. 43, 12, 839-846.
- Parker, J. D., Bagby, R. M., & Taylor, G. J. (1989). Toronto alexithymia scale, EPQ and self-report measures of somatic complaints. *Personality and Individual Differences*, 10(6), 599-604.
- 詫摩武俊, 戸田弘二(1988). 愛着理論からみた成人の対人態度: 成人愛着スタイル尺度作成の試み. *東京都立大学人文学報*. 196, 1-16.
- Taylor, G. J., Bagby, R. M. & Parker, J. D. A. (1997). *Disorders of affect regulation: Alexithymia in medical and psychiatric illness*. Cambridge Uni-VerSity Press (福西勇夫, 秋元倫子 訳: アレキシサイミア感情制御の障害と精神・身体疾患, 星和書店, 1998) .
- Taylor, G. J. (1994). The alexithymia construct: Conceptualization, validation, and relationship with basic dimensions of personality. *New Trends in Experimental & Clinical Psychiatry*, 10-2, 61-74.
- Wise, T. N., Mann, L. S., & Epstein, S. (1991). Ego defensive styles and alexithymia: A discriminant validation study. *Psychotherapy and Psychosomatics*, 56(3), 141-145.